歌集

空の色

尾上柴舟著

たまぐしのしんも
わかきも
りはすゝはぐ
あをにわぐりくご
ゆえるるなわくり

はあち

空の色

大空の色も深さもかはらねばまたわが涙おつ
るなりけり

神に問ふ世にわが如きものありや何に似せて
かわれをつくりし

生きつゞきあるより外のすべをなみ今朝も臥
床に目をあけにけり

日にたまる机の上の塵にだに如かずやひとり
わが思ふこと

たちどまりふとこそ思へ大地のこのわが足を
吸ひも入れよと

天地のなしのまにまになる事の中にわが居て
ひとり歎かふ

しろがねの瀧のやうにも降りそゝぐ雨の下なる那須の青草

（妻の病を養ふとて飯坂溫泉にゆく七首）

古き國陸奥は悲しな伊達の山信夫の山のほの曇るにも

桶すゑてやどの女の米洗ふ川原の石の夕ぐもりかな

いにしへの夷の馬の越え馴れし川にまで來つ
妻がためとて

こまごまとさゞれのひまを行く水にうつろふ
宵の秋近き星

眺め入る人の瞳をうるませて山明らかにさす
夕日かな

灰色の大いなる布波うつと夕べの海をながめてぞ居る（塩竈より舟にて松島にゆく五首）

きいきいと櫓の音すれば海草の緑後に流れ舟行く

島かげのくらきをめぐる舟の中に櫓の音聞けばわが身果敢なし

島の膚赤きにさせる日の光うら淋しもよ初秋
にして

松島の松に涼しく蟬啼きてみちのくの秋はさ
やけかりけり

目に障るもの一つなき石原に深く息して仰ぐ
大空（玉川のほとりにて六首）

石原はかぎりあらねばわが憂はてしも知らず
ひろごりにけり

石ふめば石の道こそはるかなれわが生活の道
の如くに

乾きたる秋のみ空におほはれて野は静やかに
霙ふるかな

夕日さす川原の小草さらさらと鳴らして秋の
蛇ぞかくるゝ

青き水ゆふべ黒みを帶びて來ぬ淋しかるべし
魚のはぬるは

細々と鳥のあとこそつゞきたれ川原の砂のゆ
ふべ白きに

かくしつゝ世界は亡びゆくものか煤烟の下に
地は悲しめり（本所のとある町を過ぎて三首）

自らがつくれるちさき文明の中にからくも息
する人等

木は黒み草は青ますいかならむ果の世界ぞこ
の世界は

いさゝかの事にみだされなだめられおちつき
知らずなれる心か
死のやうに靜まりてある日も來れ凪のやうに
もさわだつ心
人の世の大事といふにあはむ日のなくて盡き
なむ生命悲しや

いかにして火と燃ゆべくも集めまし散り[illegible]つ
きしわれの力を

さくさくと草刈る鎌のひゞきより野べは霧晴
れ空青く見ゆ

しめやかに白き光をてりかへし明月のもとに
木はたてりけり

あてもなく餌をさがしにと急ぎゆく鳥とひとしき身をいかにせむ（鳥三首）

一本の野木だにあらば宿らむを鳥のためにも悲しき市路

安樂の巣をとく出でていづくまで鳴きつゝ行くぞあはれ生物

かすかなる心輕さをおぼえつゝふみゆく朝の
道の土かな

しみじみと冬の寒さの身に入れば心深みをお
ぼえ來にけり

夜の氣の球(たま)と凝りてもすがりつく玻璃戸の中
にともる燈火

水のごと月照りくれば大海の魚のこゝちし出
で遊ぶかな

竹藪に冬の朝日のたゞさせば鷺ぞなきつるそ
の梢ごとに（旅をおもひて五首）

樺色に枯れわたりたる草山に高く影して行き
行きし雲

瘦せし山にはかに迫り冬のかげ暗きところに湯ぞおちにける

日に濡れて竹のさ枝のみな伏しつおく霜おもき冬の裏山

暗き山胡粉こぼしゝ如くにも曉の雪のみだれたりけり

人の世のもの遠ざかり遠ざかり病める妻のみ
浮きいでて見ゆ（妻また病む三首）

ふとしては病み臥す妻をうち忘れ樂しき家と
思ふなりけり

病みぬれば大天地に一人なる妻よと思ふいよ
いよ思ふ

夜晝の氷枕にみだれつゝ拔けや增すらむ妻が黑髮

（妻を病院にやりて三首）

妻あらぬ家の明るさ空しさに黑き影さし雪降り來る

灯を消せば病室が見ゆうつとりと此方（こちら）むきたる妻の顏見ゆ

春の空うるめる星と眼をあはせひとりわが寢る玻璃窓のもと

額髪あまた切れしをかき撫でて妻まづ云はむ事は何事（妻病院より歸る三）

いと遠き夢の中にも見しものか夕日の中を行きし釣臺

ゆふぐれの道を思へばまた妻がかの釣臺のきしむ音する

ほたほたさ枝の尖よりこぼれ落つうるほひ滿てる春の夜の雪

何ならむうれしき事の數多ある心の上に春は來りぬ

大海のくらき緑もにほふまで春の日あたる壁の油繪

あしたふむ館の前の石だたみ冷やかさより湧ける嬉しさ

ちよろちよろと春のよろこび流し入るゝ川あり君が苑の大池

安らかに土の上には落ちもえで風にたゞよふ
雪も悲しき

若草のもゆる野を過ぎ山を越えわれらが行かむ日の早く來よ（伊東を思ひて二首）

湯の烟しろく捲きては崩るらむわが行く里の
春の嵐に

あゝかくてとはに生くべき身なりせば海海來りわれを取り去れ（伊東にて七首）

あたらしき生命の潮(うしほ)たかまると波一齊に聲あげにけり

あきらかに淡花櫻ゆらぐかな御寺の山の春の青きに

うす曇る春の日の下ほの匂ふ彼岸櫻のものたよりなさ

うち寄せし波の白泡岩の間に消ゆるおとして日ぞ正午(まひる)なる

折れかへる波の穗尖の靑光つよく目を射て夜は更けにけり

半島の山青やかに暮れゆけば峡のさくらの色
のかなしさ

いたましく病みある人に向ひかね夕べの濱を
見に出でにけり（伊東にて妻また病む七首）

かゝはりもあらず波うつ海に來て憂をぞする
歎をぞする

いさゝかの醫療器械をさがしゆく貧しき町の
春の曉

さくらばな青白くさく春山の緣にむかひ歎を
ぞする

おちつきて脈とりそむる村醫者にすこし靜ま
る旅心かな

春の日の夕さりくれば伊豆の山段々畑の麥ぞ
けぶれる

はかなくも一重櫻のさくが見ゆわが一人越え
歸るべき山

人殘し歸る山路の朝の馬車友あらずして乘ら
るゝものか（妻を伊東に殘して歸る六首）

歎き來る心のごとく山の岩かなしき雨にぬれ
そめにけり

綠にして半ばかりは越えぬともこの草山を人
ながむらむ

春山のあしたの綠あかるくも鶯ぞ啼くあはれ
うぐひす。

ふすふすと野火の烟のたちまよひ古草匂ふ山
のいたゞき

色あさき一重櫻のほんのりとうつろふ山の空
のさびしさ

うちのばしあぐる衾ぞよくあがるあな不思議
手にいたみあらざり（ある朝手の痛にはかに去りぬ十一日）

つと立ちて强くわが手を振りてみつ殘る痛み
のきづかはしさに
縱に振り橫に振りまた圓く振るあゝ手に途に
痛みあらざり
わが息の絕えなむ日まで續くべき痛みと思ひ
しあはれ昨日よ

天つ日の下に強くも足ふまむ全き人にわがかへりけり

天地のいづちむけてか感謝せむ生れしまゝとなれることの身を

いひしらぬ力を人に見せつべき奇蹟の人とわれなりにけり

これやかの大き力の象徴か描く手を振りわが
描く圓（えん）

人も見よ夏の日の下肉體の全くなれる我今し
行く

肉體の今日の尊さいさゝかのさやりもあらぬ
今日の尊さ

天地を深き綠に安樂をわれにかへしゝ初夏あはれ

今のごと細かくふるふ心もて誰かむかひし六秩父山

（飯能にて六首）

峯の上に峯ありあをく光りつゝ大空の日に近づけるかな

夏の衣(きぬ)夏の帽して輕やかに立てり風吹く山の
いたゞき

武藏野のはての山より天つ日の靑くかげろふ
國見するかな

初夏の日のわかわかゝ照りわたる山の谷間に
啼きかはす鳥

青山の谷間の晝の靜けさに心ぞ通ふ木にも草にも

下かげの若木のみどり一筋の道のうねりにつと光りけり

やゝ深く人の上をも考ふる餘裕をばえつ年闌けにけり

草藉きてしづかに梢うち仰ぐ夏のあしたのもの丶尊さ

まつすぐに淀みもあらず飛ぶものか玻璃の窓あけ放ちしとんぼ

青澄みて雲一つだになき空にあれあれとんぼ飛びのぼるかな

夕されば俄に西にたゞなはり雲も動かずなりはてにけり

生ひいでし性にたがはず花著くる草に如かねば歎かひをする

底いたみすこし癒ゆれば勿體な腕(かひな)きびしく思ふなりけり（再び手を病む三首）

凡人はあさまし日々に身の痛み薄らぎゆけば
神を忘れつ

天地の深き心をおもふべく人は病を持つべか
りけり

初夏の日をさまざまに照りかへし輕く林の葉
の躍るかな

豐かにも葉をつけし木の中にゐて何の憂に枯
れし梢ぞ

光りつゝ一樹ぞ立てる夕づく日かなたになり
てか黑なる闇

うす青くひかれる水をうち渡りあした行きに
し道のおもほゆ

浮草い繁みを出でて魚や食ふすはわが浮標の
動きそめたる（羽田の池に釣して六首）

物馴れにわれわれの釣絲あなをかしついと曳かる
るつゝと曳かるゝ

いつはりの餌にな寄りそと思ひつゝ投げやる
綸をまたもひく魚

白き雲すこし散らしてうつりたる空の底より
魚浮び來ぬ
暮近くなれば心の浮るらむ魚等むれたち遊行
をぞする
葦の葉に風ふきそよぎ古沼の水の憂ふる夕べ
となりぬ

夏山はものおともなし乾きたる道の一筋白うつゞきて（伊東にゆく道にて二首）

谷かげの若杉林ほそぼそと水こそ落つれあはれ夏山

沖遠く來てわが肩を越えし波渚にのぼりつとを聲あぐ（伊東にて十四首）

快くわが足を伸し手を伸せば水の世界そもの
やはらなる
手を伸せばおのづからなる羽根蒲團碧き潮に
身はふはと浮く
いらだてる潮の心を壓しつゝ海おごそかに高
まれるかな

藍碧の潮(しほ)にまかれてわが立てばしみじみおぼ
ゆ海のよろこび
默しつゝ網ひく男女(をとこをんな)ちのすがたものめく夜の
沙濱
身かへし魚のはぬれば網の中にたまれる水の
青く流るゝ

岩の間にましろき泡をうち散らし潮あかるう
も湛へそめたる

渦なして潮のめぐれば底の岩黒き赤きが目を
くるめかす

直射する正午の光靑澄める中にまぎれて海は
深しも

大海の晝の事なさ船底の魚のはねあふ音ばかりする

音もなく波よせかへり大海の眞中の晝は夜の如しも

大海は尊きろかも神の世のまゝの力に波高く撼ぐ

濱近く歎きの聲をよせて來て黑く佇るゝ月の
夜の波

木々の皆黑き背を見せて立つ月夜の岡は淚ぐ
ましも

夜の空は澄めり綠の灯をかゝげ星近づけり秋
立ちぬとか

天地にわれと等しき物のなきこの一つ故慰みもする

天つ日の燃えそめしより世に出でてわが歎くべく定められけむ

かへりみてまたもわが身を祝福すこの悲しさもわれ一人なり

傳ふべきすべをば知らず古へもわがごと歎き
人はありけむ

朝過ぎぬ夕暮過ぎぬ夜となりぬわれを憎むに
われを愛づるに

明けゆかばまたよき事もあらむかと空頼みし
て夜を早く寢る

御前追ふ騎兵の小旗ちらちらと二重橋いま明けわたるなり（即位の大典に京都へ行幸せさせたまふをおくりまつりて九首）

生きの世にありて再び拝しえぬ今日の御列今し近づく

しつとりと朝の白露下りたれば御前騎兵の音なかりけり

御羽車朝の日なしていつくしくかゞやきませば涙こぼるゝ

ぬかづける群集(ぐんじゅ)の前の眞砂みち六つの御馬近づきにけり

皇御孫(すめみま)のしらす御國に生れ來て今日の群集(ぐんじゅ)にわがまじりをり

大君の大御民てふ一ことの胸にぞあまるぬかづきぬれば

大帝(おほみかど)いまわが前を過ぎたまふかく思ふだに畏きものを

よろこびの涙みちたる眼にうつる花瓦斯の火の大いなるかな

巷の灯あとへあとへと流れ去り今東京ぞわれを離るゝ（甲斐信濃に旅して十六首）

冬なれや旅馴れぬ子の目に迫り鋭く山の峙てるかな

晝深し山のくづれの一筋の強く流れて谷はさびしき

旅心急へ来たれば諏訪の湖のゆふべの波ぞ遠
光りたる

我が妻よ幾山川をめぐりきてなほもわが行く
わが一人行く

春のどごうち煙る日の末とほく晴れたるかな
や小さなる富士

籔原やこがらし吹けば古畑の桑の枯枝鞭のご
と鳴る

さびしきは短き生命とこしへの幾山川を傳ひ
ゆくこと

山の峽くらきをわたる旅人に神は朝日をさゝ
せたまひぬ

小木曾山せまき谷間にあなさやけ雪の御嶽見
ゆるならずや

見て行けば川とともにも走るかな心の底の一
筋の水

額つけて川見る心馴れ來つる窓の硝子も知ら
ずやあるらむ

落葉木の白き谷かげ安らかに煙上げをり杣人のむれ

朝の霜雪とおきたる岩の上に眞木流すとて立つ人あはれ

暗くらく迫り來たれば爭ひて眞木こそ下れその早き瀬を

ほのぼのと靄の中より日のさせば筏流す子が家のあたり見ゆ

深々と夕日の下にひろごりてまことに水の静かなるかな（宇治にて三首）

炎なきともしびのごと夕日いま沈まむとして川ぞ痛める

夕日かげ消えたる堂の片扉淨土つめたくます佛かな

男なるたゞ一人なる肉身のわれが來れり兄よさめませ（故郷なる長兄の死にあひて八首）

兄あればあればと下に思ひにき思ふ心は異なりしかど

肉身が來れば流るといふ血汐兄の口より流れ
けらずや
禮拜に着せ母に着せつる多の土兄に着すべき
目はつひに來つ
たゞ一人生きつゞきつゝある事が面なくなゐ
ぬあはれ兄上

なき母の古き柩にあたりぬと事なげにいふ穴
掘るをとこ

わが上におほふべき日も遠からぬ土をば快よ
く掘るをとこ

事もなくおなじ人らの集ひきぬ母を葬送(おく)りし
時のごとくに

殘りゐて今もつ望みはれわれ兄の如くに淸く
死なまし
稿白き村の板橋弓なりに曲げてゆすりしわが
幼などち
あたゝかき夜をしらじら降る雪に湯浴してゐ
る身のうれしかり

動きつゝ死を待つ心入定の僧の心とたがはざるべし

今日もまた人と論理のたはぶれもなして來にけり生きゐるが故

たゞ一つ殘るは死のみ年ながく待ちにしもの
は皆逢ひたり

おなじ事おなじ愁にかゝづらひゐる身うごまし

わが身うとまし

飛びうつり一木の枝にかゝはらぬ庭の小鳥も

われにまされる

たまゆらの生きのいのちを喜ばむ物を思はぬ

草はうつくし

母の逝き兄のうせにし日のまゝに古竹籔に陽さし時雨す（兄失せし後再び故鄕に歸りて六首）

茶の木原なかぬ鶯ついばむを兄と追ひにし冬を忘れず

蕗の薹かすかに青み古邸竹籔ぞひによき日さすかな

古郷昔のまゝの草に木にむかへば兄はなほ生きてあり

そのかみは汲み爭ひしあかの水けふわが手向く兄は知れりや

大寺の御堂の奥の位牌の間兄の先づ入り拜みしものを

頂は吹雪に曇り嵐山こずゑこずゑの白きあけがた（嵐山にて二首）

雪しろき山の峽よりつめたうも戸無瀬の瀧のおちやまぬかな

今宵また寢ぬべくなりぬ物思ひし事だに今日のせしことゝせむ

あらかねの土の下より起るごと物打つ音の夜
ふけてきこゆ

命さへ人に任せて電車にも乗るわれなれどわ
れを忘れず

萎びぬ畑よりならむ朝まだき雲雀のあがる
空の冷たさ

今の身のまゝにあらむを願はねど願はむもの
もあらぬ淋しさ

さし注む朝の光に木々の枝(え)のけぶる谷間を見
て立ちし山

月の夜を風吹きくれば木か花かわかぬ匂の傳
はり止まず

癒えがたき病と聞きてあふぎ見る初夏の空の
あはれなつかし（病みて二首）

すがやかに初夏の月のかたぶけばすこし病む
身を起しても見る

うすぐらき靄の中より重なれる人家の見えて
島し近しも（江の島にて四首）

こまやかに雨のしぶけば棧橋の板間の波を見てばかりゆく

すきとほる島の眞水に身をひたし緣の中にする湯浴かな

青黑き潮につゞきて午後の雨白き島回をわがひとり見る

若葉皆うらをかへして島風の響こちたき中に
たゞよふ

悠紀の歌淡々として響きいづる御幕の中の午
後の静けさ（雅楽所にて久米舞及び太平楽をみる六首）

かきひくや天の緒琴のさやさやに風吹き通ひ
晝は深しも

香具山のひかげの蘰(かづら)さとゆすり久米の若子ら
大刀ぬきはなつ
ぬきつるゝ剣の光けざやかにあはれ久米の子
舞ひ立ちにけり
金の矛つと一斉に輪をかけば日はも喜びかゞ
やきめぐる

立ち列(な)みて戰士四人が矛ふれば金も碧も搖れやまぬかな

青床に戰士ら矛を樹(た)つる時どと音したる大太鼓かな

花つけすなりし橘あはれわが兄のかたみも十年經にけり

うまごやし白き花ふみ立てる野にあな夕暮の杜宇鳴く

初夏のこの嬉しさに堪へがたみ青草の山に來ては海見る

こまごまと緣ひたせる水たまり靜かに庭は夏めきにけり

麥の畑青葉の岡のはてに見る初夏の日に白けたる海（上總に行く途上にて三首）

おさなしく白帆ぞならぶ初夏の東京灣の夜のあけ方

松のかげ明らかに布く砂山に夏よと空を仰ぎみるかな

夏立つや竹御間（おんま）の御壺（おんつぼ）の竹のゆらぎも尊か
りけり（地久節の日参内して四首）

風ふけば片靡きする噴水に丸くぬれたる宮の
御芝生

目かゞやく豊明殿の大床も今日なればこそふ
みわたるなれ

前近う立たせますとは思へども心空なり臣の
子われは

ほのぼのとシートの白む曉にねざめてきけば
蟬ぞなくなる

軒近き枝にしばしば啼き出でゝ高音張りえぬ
その蟬あはれ

蟬の聲枝をゆすれば病葉は露とゝもにも落ちしきるらむ

秀でたる彼の木なるらむ蟬一つ高く調子を張りそめにけり

夏深き午後の机に汗おとしわが勤むれば生きがひおぼゆ（夏休のころ研究室にて十一首）

死戦する人の如くに目稜立て視力あつめてわが繰るカード

ほと息し立てば夕べのかげ迫る机の上に白しカードは

命をばかけし仕事にあらねどもすれば心の張りみちにけり

ゆきつまる心の前に腕組みて思へば何になせる仕事ぞ

夏の夜の更けてわが猶繰るカード白きがすこし眼に沁み来る

ゆきつまりつまれば道を拓きゆくまだわが力ゆたかなるかな

蟬なかぬ日はありしかなあしたよりカードこらざる日はなかりけり

指すこししびるゝおぼゆさ夜更けてカード繰りをへ呼吸をしつけば

わが仕事はかどりゆけばうれしくも生きてゐるよと身を思ふかな

わが世界すこし見えけり夜に晝に苦しき道を
拓きすゝめば

いとほしみいとほしむ間にわが心わが身か弱
くなりはてにけり

山行けば何の憂ぞ悲しみぞ來りて心しみじみ
とする（日光にて四首

紅葉せる雜木の中に枯れし木の明らかに見え
山晴れにけり

わけのぼり初めてひとり湖（うみ）を見し人のおどろ
き今日ぞわがする

濃青なる波に浸れるわが舟をあはれと見べき
人もなき山

樂の聲波のやうにも起り立ち行幸間近くなり
にけるかな（觀菊の御會――四首）

うちたるゝ頭の前に御靴の音こそひゞけ綾く
靜けく

あなかしこすめらみかどは神ながらわれらに
御目賜ふなりけり

御衣(みそ)の音御靴のひゞき耳近く聞きまつるだに畏きものを

暮れかねてやゝたゆたへる年の中にわが身一つの哀れなるかな（年の暮に）

運命(さだめ)あれば人と人とは行きあひぬあゝわれ何にあはむとすらむ

わが力限をつくし得むと思ふものあれものあ
れ大空の下
心より喜ぶ時もあらむかと待ちつゝ今日の日
となりにけり
よひよひの涙となりて流れ落つわが拙さが爲
せる事みな

鬣の筋黒まらずして數多(あまた)おつ就くがまゝに來
しやおとろへ

神ながら神さびせすとわが大君冬の御苑に駒
みそなはす（御馬をみそなはす日吹上御苑にて六首）

大君の御目に入らむと首たかく斷え足掻き駒
ぞいさめる

赤駒に黒駒つゞきうちめぐる馬場の上をわたる雁がね

風のごと駒の走れば春霞流るゝなして母衣ぞ流るゝ

行きはてゝ駒のめぐればたゆたひてまたも流れつあはれその母衣

鐘鼓一つに鳴れば四十人（よそたり）ははやり切りたる駒

うち放つ

蹴けちがふ駒の足音たしたしに雹や戸を打つ

あらず球打つ

これやこれ吾子（わこ）かわが子か小さなる眼よ唇よ

これやわが子か（生れしのみの子を失ひて十首）

父といふ心たしかにならぬまに寂しきわれに
またかへりけり

など更にいたむ心ぞ死といへる大事にあまた
逢ひしならずや

吹き募る午後の木枯窓の戸をゆすりて妻の熱
し高しも

白々とわが子の骨の見えて來ぬあな朝の日の

あきらなるかな（火葬場にて）

賢きは思ひでぬこと云はねこと術なほあらば

神は教へよ

などか思ふとく忘れよとわが心叱り足らずて

妻を叱りつ

今日もまた云はであれよと思ふことと妻の云ひ
いでて悲しき日かな

云ひ出づな思ひ出づなと云ふまゝにまた云ひ
出でぬまたも思ひぬ

うせし子の眉わ面ざし日に添へて薄くなりゆ
くことの嬉しさ

開きつるかの唇をしのばせて薄紅梅の咲く日
となりぬ
ともすれば人なみなみにうち笑ひわれも一つ
の佯を持つ
かゞやかに夕日のさせば失ひし今日の一日の
悔ぞさやけき

はかもなく消えゆくわれの一片とわが歌ふ歌
をしみじみと聞く

憂へつゝあるもいかなる幸ぞこの一事をまづ
感謝せむ

悲しみの形をとりて皆來るたゞおほらかにお
もひつる事

かゝはらずめぐり行く地の上にしてわれの愁
をわが一人する
後の世に傳へむほどにあらずともわれの愁を
人の續げかし
いかに云ひてわれのまことをあらはさむよき
伴を人はよろこぶ

かへり來ぬ吾子(わこ)だにあるを庭の木は去年のご
とくに芽を吹きにけり

春といへばよみがへりゆく庭の面の苔にも吾(わ)
子(こ)は如かざりしかな

わが涙乾き盡きけむ今日の日のこの悲しみに
あへど流れず

ありとのみ神の使命を信ぜりしその日の心淨かりしかな

何故に生きてありとも知りえねばつとめの如く歎をぞする

青麥の畑の新土くろぐろと灰ふり來る火は近しもよ（中野にて火を見る六首）

火ぞ來る篁越えて火ぞ來る竹の青葉の燃えつつ來る

風に飛ぶ竹葉をさきに目の前を炎の舌の閃き行くよ

篁は靡き起き立ち紅の車輪とめぐる火の穗尖はも

聲たてゝ朝の篁波うてば風に乘りつゝ火ぞ越
え來る
黑烟渦をまきつゝまろびゆく青麥畑の朝のと
よめき
徑ならむ鋭くもゆる火の中に罪人のごと聲を
立つるは

行幸待つ苑の廣道針葉樹細かに春の影おとし
たり（觀櫻御會の日三首）

うちならび額づくまへをかゞやかに春の日の
ごと君は過ぎます

くれなゐの花のちさきが滿てるかな君が踏ま
しゝ苑の御芝生

人はまだよらぬ芝生の椅子の群日につやめきて靜かなるかな（某氏の園遊會にて七首）

若楓影布く中にあなはかなつゝじの花のうすき紫

初夏の風に波立つ手品すとかくる舞臺のくれなゐの幕

夏の來て絹のやうなる芝ふめば嬉しくもあるか今日の新靴

樂の波高くおこれば魚のごと手品女は動きはじめつ

椎の葉の散りてまろびて庭山の夏冷やけき石だたみかな

つばくらの如くさへづり身をかへす手品女に
夏ぞすゞしき

わが病妻の病と癒えもせず庭の若葉は黒ずみ
にけり

はした女が夜ふかく氷くだく音わびしき音の
起るものかな

天地のもの丶斜になりぬやと思へばわれの薄(うす)眩暈(めまひ)する

電燈の光縞なす蚊帳の中にいねられぬ身は起きてすわりつ（木更津にて五首）

大空は風蝕して灰色に夏の干潟は明けにけるかな

かなしきは濁りはてたる風の海風に立てられ
仆れえぬ波

一條の波の堤をかぎりにて風に乾けり朝の干
潟は

さかさまに汐入川の水流れ夏の濱口風つよく
吹く

蟬の聲露もつ木より響き來て筆とる朝のすがすがしさよ（研究室にて九首）

流るゝが如くことばの出でくればあなや嬉しと聲たてゐわれ

飛行機のプロペラの音淡雲の中にひゞきて正午（ひる）し近しも

一つゞき思ひえし事書きはてゝ仰き臥せれば
夏ぞ淋しき

血眼になりて朝よりとる筆の穂尖さながら刀
のごとし

やはらかき紙の光の眼を射ればおのづから湧
くわが力かな

雲影もあらぬ眞晝にひろごれる廣場の砂の眼
に痛しもよ

淋しさを消さむとしては思ふこと「わが書くこ
とは正しかりけり」

思ふこと一つ殘さず書きはてしあとのさびし
さもの丶足らなさ

散らばりて眞砂の上におつる日も黄を帶びに
けり秋し近しも

宵の雨のなごりの水にさす影も晴れやかにし
て秋は來にけり

物の影とすれば薄れ薄れしてはかなき秋の日
となりしかな

とぎれとぎれ蟬なき出でて初秋の雲間の朝日影のすゞくなき

初秋の風に心やおびゆらむあわたゞしくも啼きはつる蟬

安房の國鋸山の石たゞみわが來てふめば霧のかゝくさふ（鋸山にて七首）

たちつゞくいはほの壁をうち越えて瀧のやう
にも流れ落つる霧

谷間より峯まで這へる葛かづら落ち來る霧に
見えみ見えずみ

岩かげの細路傳ひわが行けば霧と清水と袖に
さむしも。

音もなく霧陣々とながれ落ち谷の篁ぬれ靡き
する

上りつゝふと見おろせば谷の寺篁の中にちひ
さなるかも

竹の露しとゞにおつる縁近く山の人らは飯食
みてをり

わけのぼる足音(あのと)ひくしも草も木も霧に伏したる秋の朝山

かくしつゝふまむと思へや風を痛み霧來霧去る岩かげの路

霧くらき蜒の岩室奥廣み羅漢ゆたかに拜みいますかな

うちむれて谷間谷間を流れいづる霧のはてなる秋の海原

次兄逝いて十年、義姉すでに家にあらず。母また逝く。一夕某氏の婚儀に招かれて某處にゆく。隣席に次兄の長官たりし人あり。余を見て次兄の平生を語る。聴き了つて悵然たるものこれを久しうす。十二首。

燈火の今宵ことさら隈なきに隱しかねたる眼のうるみかな

こまやかに語らふ人の言問けば兄はよき名を
殘したるらし

眼の前の花の色やゝうるみきて涙落つべくな
りにけるかな

人皆のことほぎあへる中にしてこはまた何に
落つる涙ぞ

二人までゆきにし兄に從はでつれなく生くる
われや何なり

とこしへにわれは一人ぞ思ふ事まことといふべ
き人のあらなく

明日逢はゞ先づ語らむの思して兄のうはさに
聞き入る弟

夜(よる)の霧ほの白う捲くからず戸の外にも兄の立ちてあるべし

人のため呼ぶ萬歳の聲の中にしふねくおつるわが涙かな

見つむれば卓の白布白々と兄のおもわの目に浮びきぬ

夜の氣は重くつめたし兄を思ひゆく弟に重く
つめたし
われはわれ兄は兄よと思ひにき悔しかりける
かの心かな
夕靄は静かにわたれひとりわが向ふ岡べの高
草の上を

麓には紫の靄かゝりたり日の入り方を山に來
たれば

清らかに身にしみわたるこゝちする湯あみの
あとの足(あな)うらの冷え

うす青き斜面の變に乏しくも光投げつゝ峽(かひ)に
沈む日

風たえぬ木だに草だに落葉だに動かず暮は悲
しきものを

鳥去にし庭の青木の葉のかげり重たく見えて
夕さりにけり

かぐろなる岡を人ゆく何事か夕月の前をうた
ひ人ゆく

わが行くは正しからぬか神あらばまづ問ふべ
きはこの事にして

友はあらず光は乏ししかはあれどわれは道ゆ
く一つ道ゆく

心にもあらで生くべき道ふめば道なきにゆく
こゝちこそすれ

わがためか人のためかはわかねども一つ道ふむ今日も昨日も

この道を生れし日より行き行けといつの人間に誰れか敎へし

生くといふ一つの事にさへぎられ思はぬ道もふみならひつゝ

いにしへの人もわがごと今のごとふみかねに
けむ道の二つを

群れてゆく人に習ひてわがふめば安らかなり
や生きぬべき道

日は照れど雨はおつれどあさなあさな出でて
わがふむ道はかはらず

わが道となどかいはれむなみなみの人とども
にもふみてゆく道

二つ道一つとなりて身と心共に生くべき日な
き悲しさ

心にもあらでゆく道一筋のはてにかあらむわ
れを待つ墓

大正八年六月十五日印刷
大正八年六月二十日發行

空の色
定價金六十錢

著者　尾上柴舟

東京市日本橋區檜物町九番地
發行者　西村寅次郎

東京市芝區愛宕下町二丁目五番地
印刷者　牛坂三郎

發行所　東京市日本橋區檜物町九番地
東雲堂書店
電話本局一八七一番(振替東京五六一四番)